



ISBN978-4-938764-05-0

9784938764050

C0016 ¥477E



1920016004771

定価500円 税込(本体477円+税)

霊の戦い (ローザンヌ宣教シリーズ No.61)

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No.61

霊の戦い

— その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明 —



Let
the Earth
hear
His Voice

Lausanne
Occasional
Papers

No.61

Deliver us from Evil Consultation,

Nairobi, Kenya - August 2000

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No. 61

霊の戦い

—その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明—

(2000年)

日本語版権は関西ミッション・リサーチセンターにあります。

目 次

序	6
I. 背景	8
1. 目的	8
2. 内容	9
3. 参加者	9
4. ローザンヌ誓約から	10
5. さらなる背景	10
II. 『我らを悪より救い出したまえ』	
協議会の声明	14
1. 導入	14
2. 発端	15
3. 共通の基盤	17
①神学的言明	17
②実践における霊の戦い	21
4. 注意事項	24
5. 意見に相違のある諸領域	26
6. 継続的研究を必要とする未研究領域	29
III. 協議会に提示された論文と会議の概略	32

IV. 補論：『霊の戦い』邦訳出版に際して	35
関西ミッション・リサーチセンター (KMRC) 正木牧人	
1. 本書の出所	35
2. ナイロビ 2000 の資料は入手可能	35
3. ローザンヌ宣教運動とワーキンググループ	36
4. ローザンヌ世界宣教運動の貢献	36
5. ローザンヌ運動のニューズレターから	37
6. ローザンヌ運動のこれまでの取り組み	39
7. 霊の戦い	41
8. KMRC の歩みと本書の出版	46

序

今回、関西ミッション・リサーチセンター (KMRC) から『靈の戦い—その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明』が、拙訳で出版されました。英語名は "Deliver us from Evil Consultation" ですが、「主の祈り」の一節の解説文書と受けとめられる可能性があるので、「名は体を表す」べきだと考え、KMRC の了解を得て邦訳小冊子全体のタイトルは『靈の戦い—その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明』とさせていただきます。

この小冊子は、「1. 背景、2. 『我らを悪より救い出したまえ』協議会の声明、3. 協議会に提示された論文と会議の概略、4. 補論：『靈の戦い』邦訳出版に際して」の四部で構成されています。

『靈の戦い—その聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明』は、『我らを悪より救い出したまえ』協議会の声明』が本体で、それのみですぐれた内容をもつものですが、声明を理解する助けとして、「背景」と「協議会に提示された論文と会議の概略」を声明の前後に加えました。さらに、KMRC の正木牧人先生が今回の出版に際して、「靈の戦いというテーマが、ローザンヌ運動の歴史の中でどのように扱われてきたのか」についての「補論」を執筆していただき、この声明をキリスト教の「歴史・神学・宣教」の三次元で立体的に見つめる視点を提供していただいています。

ナイロビ声明は「世界伝道と靈の戦いの関連性」について様々な捉え方がある中、全世界より 60 人の神学と実践の専門家が参集し、聖書的・歴史的・神学的・今日的・地域的・宣教的・戦略的な包括的理解が「①共通の基盤、②懸念される事柄、③意見に相違のある領域、④さらなる調査・研究を要する事柄」の四つの分野に見事に整理され、声明として出されたものです。

またこの声明は、特定の見方をもつ側につこうとして作成されたものではなく、論争をもって現われてきた主題に関し、福音主義的思索を広げることを意図して作成されたものです。

さて日本の福音派は 90 年代以降、このテーマで“乱気流に巻き込まれた飛行機”のように、誤解・混乱・亀裂を経験してきました。しかし今ようやく視界が開け、安心して“ソフト・ランディングできる滑走路”を見出したように思います。そのひとつが『靈の戦いに関する聖書的・包括的理解に関するナイロビ声明』です。この声明は、『靈の戦い』について賛成派も反対派も共に受け入れられる聖書的かつ包括的なガイドラインの基本を提示しています。そして、この声明が神の栄光のため「靈の戦い」に関する率直な議論、真剣な熟考、実際の奉仕を刺激し、日本の福音派諸教会において、学び活用されることが期待されています。

出版に際し提供されました KMRC の子安敏夫先生、有木義岳先生、鍋谷堯爾先生、正木牧人先生等、多くの先生方のご協力に、また、快く出版資金の融資に応じてくださった私の所属団体である日本福音教会 (JEC) に心より感謝申し上げます。

一宮基督教研究所：安黒務

<http://www.aguro.jp/>

aguro@mth.biglobe.ne.jp

「我らを悪より救い出したまえ」協議会声明 2000年8月に、ケニアのナイロビにて

I. 背景

「世界伝道のためのローザンヌ委員会」の下にある、神学的戦略ワーキング・グループ (TSWG) ととりなしのワーキング・グループ (IWG) は、アフリカ福音同盟と共に、2000年8月にケニアのナイロビで、60人の重要な理論家と実践家を集めて、霊的闘争／霊の戦いに関する協議会を開催した。

1. 目的

「世界伝道のためのローザンヌ委員会」の焦点は、世界伝道である。これは、「教会を倒し、教会の世界伝道のわざを失敗に終わらせようと絶えずもくろんでいる悪の力と支配とに対する、たゆまざる霊的闘争」(ローザンヌ誓約 第12項)についての不可避の要素を含んでいる。この協議会の目的は、以下の事柄についての聖書的かつ包括的な理解を得ることである。

1. 敵とは、誰なのか？
2. 敵は、どのように働いているのか？
3. 私たちは、すべての人々に最も効果的に福音を宣べ伝えるために、敵とどのように戦うことができるのか？

2. 内容

この目的は、以下の関連領域における聖書学者、宣教学者そして実践家からの情報を入手することによって達成される。

1. 聖書的・歴史的基盤
2. 神学的解釈
3. 霊的戦いの今日的・地域的脈絡、地方教会と世界宣教の中における宣教に対する反応とその戦略

3. 参加者

私たちは、得られる何か新しい理解が彼ら自身のネットワークを通して、霊性についての異なった要素をもつ人々に伝達されるかもしれないとの希望を抱いて、この主題を今しっかりと把握し、幅があり広がりのある様々な捉え方をこの協議会で説明できるよう努力する。発題者には学者と実践家の両者が含まれている。

4. ローザンヌ誓約から

「私たちは、教会を倒し、教会の世界伝道のわざを失敗に終わらせようと絶えずもくろんでいる悪の力と支配とに対する、たゆまざる霊的闘争のただ中に置かれていると信じる。また、私たち自身を神の武具をもってよろい、真理と祈りの二つの霊的武器をもって戦い続けてゆく必要のあることを知っている。私たちの敵の活動は、教会の外にある偽りの諸思想の中ばかりではなく、聖書を曲げ、人間を神の位置に置こうとする、教会内部に存在する偽りの福音の中にも探知できる。私たちは聖書が提示している福音を守るために、絶えず目を覚まして監視しなければならぬとともに、識別力を身につける必要を感じる。…」

(ローザンヌ誓約 第12項 霊的闘争より)

5. さらなる背景

この協議会の主題に優先性が付与された幾つかの理由が存在する。

1. 最近の10年間、あるいはそれ以上の期間、福音主義の世界において、この主題に非常に高まった関心が寄せられてきた。しかしながら、このことは、この関心を造り上げてきた諸傾向に先導されてきた。

(ア) 世俗の世界において、生への純粋に合理的なアプローチに関して幻滅感が増し加わってきた。

(イ) 教会において、合理的なアプローチに密接に結び付けられてきた主流派諸教派に深刻な衰退がみられる。

(ウ) 西欧には、1960年代以来、東洋からのオカルトの思想や

実践が普及してきている。これは、ニュー・エイジの思想への高い関心にみられる。

(エ) 麻薬の文化は、同じ時期に青年男女の世界に大きく広まった。

(オ) ペンテコステ派とカリスマ派の教会は、新しい霊的経験と悪霊追い出しの実践への開かれた態度によって大きく成長してきた。

(カ) クリスマンは、西欧への大規模な移民の結果として、イスラム教、ヒンズー教、仏教、シャーマニズムとより多くの接触を持つようになってきた。

(キ) 霊の戦いの祈り、悪霊憑き、悪霊の影響のある(人、組織、地域)、地域を支配する霊、等のような諸問題に関して、不明瞭な境界線や多様な解釈や実践が存在している。何が聖書的であり、何が聖書の外のものであり、何が非聖書的/非キリスト教的なのか。

(ク) 西欧における民族的諸教会の存在と現代のメディアを通してのより広く、より早い報道は、彼らの霊性形態により大きな親近感をクリスマンに与えてきた。

(ケ) ボスニアやルワンダにおける民族虐殺のような激しい民族紛争は、霊的戦いの脈絡において、どのように理解されるべきなのか。

(コ) 悪霊、諸霊そして異なった種類の超自然的存在に与えられてきた卓越性に関し新しい語彙を流布してきた、氾濫する書籍、学科、セミナーによって助長されてきたことによる福音主義世界における信仰と実践の変化がある。

2. 五つのカテゴリー：教会は、五つの範疇のひとつに位置づけられる傾向を持っている

- (ア) 霊の世界についての思想を、軽蔑をもって退ける人々
- (イ) 程度差はあれ、霊の世界についてあまり知らないし、それゆえその領域に関して何らかの研究も発展させてこなかった人々
- (ウ) 霊の世界について知っており、祈り、超自然的なものを信じており、そして最近の実践の変化に没頭し、多かれ少なかれ寄り添って行くが、そのすべてについて多くの疑問を抱き、幾ばくかの不安や欲求不満をもっている人々
- (エ) 彼らの指導者の見方を受け入れ、またそれを自分自身で吟味し、そして疑問をもつことなく、霊的戦いに加わり最近の実践に取り組んでいる人々
- (オ) 彼らが、霊の世界に関する聖書の見方そして祈りの訓練として考えているものをいつも持っており、新しいアプローチを非聖書的なものとして退ける人々

「この見方は、以下のものにかんがみ、かつて教会が神の諸々の武具について理解し使用してきたことにまさるより大きな必要が生じるや否や、福音主義者の間に不和を生じさせる影響力をもっている。」

 - i . クリスマンがほとんど存在しない未伝地の民族に到達しようとしたり、国々に入って行かせようとしたりする広範な試み
 - ii . 西欧における教会、世俗化した世界、ポストモダニズムの経験中心的な文化の諸々の影響と戦う必要
 - iii . 辺境開拓伝道の状況にある人々への暗黒の世界の支配者たちからの活発な反撃

3. 第一節における傾向の幾つかは、世界伝道に関し重大な問題提起をしている。

- (ア) 事態を不適切に悪魔の働きに関係づけることにより、人間の責任が無視されるころでは、クリスマンの道徳の基礎は危うくされうる。
- (イ) ひとつの文化における福音の適切なコンテクスチュアリゼーションの問題が、その正しい解答は適切な霊的な戦いであるとする理由づけされ、しばしば避けられてしまう。
- (ウ) 明らかに聖書にない思想を進んで考慮したり、実践に従ったりしようとする際に、聖書の権威の性質が議論となる。
- (エ) 「支配者たち」についての聖書の教えの扱いにおいて適切な解釈の問題が持ち上がっている。
- (オ) 団結すべき信仰者の一致、またその能力にすら、密かに害を与えられている。

II. 『我らを悪より救い出したまえ』 協議会の声明

1. 導入

「霊的な戦い」は、全世界へ全福音を届ける際に明らかな、しかし簡単でない未研究分野である。熱狂と懸念が並び置かれている。多くの複雑な問題を明確に把握せんと、2000年8月16日～22日の間、30人の実践家、宣教学者、牧師そして神学者がケニヤのナイロビに集結した。私たちは共に、世界伝道のためのローザンヌ委員会とアフリカ福音同盟によって召集された協議会『我らを悪より救い出したまえ』において「霊的な戦い」の諸問題について討議した。協議会の目的は、①敵とは誰なのか、②敵はどのように働いているのか、③全ての民族に最も効果的に福音を宣べ伝えるために、私たちは敵とどのように戦うことができるのか、について聖書的で包括的な理解を探究することであった。

私たちのグループには、ラテン・アメリカ、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、オーストラリア、米国からの解放と祈りのミニストリーの実践家たち、アフリカと北米からの牧師や福音伝道者の指導者たち、救済と開発の政府機関の行政官、北米で働いているアフリカ人心理学者、アジア・ヨーロッパ・北米から神学者、アフリカとラテン・アメリカで働いている宣教師たち、ヨーロッパと北米から宣教会責任者たち、北米とヨーロッパから宣教学教育者たちが含まれていた。私たちの間には、長老派・ペンテコステ派・メソジスト派・聖公会・ルター派・バプテスト派、そして西アフリカ福音教会・南インド教会・ベラッシャ

預言教会・福音カベナント教会・ブレザレン教会・クリスチャン&ミッショナリーアライアンス・聖書教会(米国)のメンバーたちがいた。

私たちは、西欧社会からの協議会参加者のほとんどが、異文化経験の結果として、目に見えない、霊的領域の現実を認識するに至ったことに興味を抱き注目した。第二・三世界からの人々はしばしば、第二・三世界の人々が日常的基礎的に経験している、それらの霊的現実に無知であり、したがって霊的現実に仕えることができなかった西欧の宣教師と一緒にそれらの経験を記録した。

私たちは、ナイロビで出会ったとき、私たちは東アフリカの兄弟姉妹の洞察と東アフリカのリバイバルから学んだ。私たちは、特に東アフリカの兄弟姉妹たちが霊の戦いに直面し、どのようにイエス、つまり十字架につけられたイエスを高く掲げたかを確認した。私たちが毎日の生活、社会、文化の中で、サタンの力を打ち破る唯一の方法は、サタンが私たちを暗闇の中で目をくらませることがないように、光の中を歩むことであることを、改めて理解した。

私たちが、「我らを悪より救い出したまえ」と祈るとき、私たちは個人的な罪、自然の諸悪、悪しき諸霊と諸力、そして社会における悪より救い出されることを祈るのである。

2. 発端

私たちの出発点は、ローザンヌ誓約、マニラ宣言、1993のLCWEの霊の戦い等、霊の戦いの闘争の現実について言明しているす

べてのものを含んでいる。

「私たちは教会を倒し、教会の世界伝道のわざを失敗に終わらせようと絶えずもくろんでいる悪の力と支配とに対する、たゆまざる霊的闘争のただ中に置かれていると信じる。」(ローザンヌ誓約、1974)

私たちは霊の戦いが霊的な武器を必要としており、私たちは御霊の力において御言葉を宣べ伝えるとともに、私たちが悪の力と支配とに対するキリストの勝利を得るために絶えず祈らなければならないことを主張する。(マニラ宣言、1989)

私たちは、伝道とは暗闇から光へ、サタンの支配から神の支配に人々を連れ戻すことである(使徒26:17)、ことに賛同する。これは、霊の戦いにおいて避けることのできない要素であることを意味している。(霊の戦いに関するローザンヌ声明1993)

協議会と参加者は、世界伝道への霊の戦いの関連性を認識している。私たちは、ある特別な見方をもつ側につこうとしているのではなく、論争をもって現れきたる領域における福音主義的思索を広げようとしているのである。この声明は、共通して合意できる領域、未解決な意見の相違ある領域、警告を示唆し、そしてさらなる研究・調査を必要している領域を指し示している。私たちの意図は、神の栄光のための霊的戦いに関する率直な議論、真剣な熟考、実際的な奉仕を刺激するべくこの声明を活用するよう、もろもろの伝統をもつ諸教会を励ますことである。

3. 共通の基盤

①神学的言明

私たちは、人間は神との交わり、他の人間との交わりに、そして神の創造物の管理者として、生きるように神の像にかたどって造られたという聖書の証言を言明する。神と人間の関係は、神の創造への悪の神秘的な侵入を通して失われた。墮落以来、悪は被造物世界と人間存在のあらゆる局面に影響してきた。墮落した被造物世界を贖い、回復することは、神の計画である。神の贖罪の目的は、救いの歴史の中に、そして神の御子イエス・キリストの受肉、死、復活、昇天、再臨の福音の中に完全に、啓示され、実現されている。私たちは、墮落の結果として破壊されたものを回復するために悪や悪しき者と戦う神の宣教に参加するよう呼びかけられている。神の宣教は、キリストが再臨され、神の国が力をもって到来し、そして悪は破壊され、永遠に消し去られるときに完成される。

1. 人々をキリストへの信仰に導くこと、彼らを暗闇の領域から救い出し、神の国に招き入れることが、すべてのクリスチャンに対する宣教命令である。私たちは、キリストと私たちの関係、信仰者の交わりにおいて彼と親密となるようにとの私たちへの彼の呼びかけ、の中にその源泉を見いだす、伝道についての包括的な理解を主張する。聖霊は、霊の戦いの脈絡において生起する言葉(宣言)、行為(社会奉仕と行動)、しるし(奇跡、パワーエンカウンター)等、すべて相互に密接に関係するミニストリーを通しての世界伝道のために私たちに力を付与する。
2. サタンは、現実の、人格的霊的な被造物である。サタンは、

荒野でイエスを誘惑し、彼を破滅させようとした。しかし、復活の朝の光の中で、自らの敗北を見いだした。サタンは、神の宣教と神の教会の働きに対し、必死に反対し続けている

(1)。

3. 悪のと支配は存在論的に現実の存在である。彼らは、単に社会的、心理学的構造に引き下げることはできない (2)。
4. サタンは、神が人間の幸福を思い創造されたものを奪うかたちで働き、個人・家庭・地域社会、社会全体を奴隷にすることで、生を破壊し、価値を減じることで、神の目的達成を妨げている。サタンは、彼の努力を多様な社会や文化の中で異なったかたちにおいて文脈化している。
5. サタンは、神よりも他の人物やものに人間の忠誠心の向きを変えさせようと企て、欺きを利用する。個人的レベルに加えて、サタンは教会を含む宗教的またイデオロギー的忠誠の組織化された諸々の形態において、このことをなしている。
6. サタンと「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊」は、以下のものを通して働いている (3)。

(ア) 欺いたり、歪曲したりする

(イ) 罪を犯すよう誘惑する

(ウ) 肉体、情緒、心、意志を苦しめる

(エ) 身体の統御を奪う

(オ) 自然の秩序を乱す

(カ) 社会的、経済的、政治的構造の役割を歪める

(キ) 暴力を正当化する手段として身代わりをたてる

(ク) 利己主義、不正義、抑圧、悪用を助長する

(ケ) オカルトの領域

(コ) 偽りの諸宗教

(サ) 救いにおける神の働きや教会の宣教に対する反対する諸々の形態

7. イエスの生涯と奉仕の第一の目的は、サタンの正体をあばき、戦い、敗北させ、彼の働きを破壊することであった。
 - (ア) キリストは、十字架において、そして復活を通して、サタンを決定的に敗北させた。
 - (イ) イエスは、祈り、正しさ、従順、捕われ人を解放することを通し、サタンと対決された。
 - (ウ) 彼が人々に伝えられた方法において、彼は世の組織や構造に対する巨大な挑戦をしかけられた。
 - (エ) クリスチャンは、キリストの勝利をあずかっているのであり、私たちはキリストにあって所有している勝利によって、サタンの攻撃に立ち向かうキリストの権威が与えられている (4)。

霊的権威に関するモデルは、イエスと彼の十字架における神への従順と服従である。

8. 神が彼の創造された世界を支配されることにおいて主権をもっておられることを私たちは知っているが、聖書の証言は病気や災害について多種多様な原因を示唆している一神、サタン、人間の選択、また精神的外傷、無秩序な宇宙等すべてのものが引用されている。私たちは、私たちが幾つかの特別な病気や災害の正確な原因について確かには知らないかもしれないことを理解している。

9. 私たちのそれぞれの文化の文脈のうちには、クリスチャンの保有する世界観の諸要素が含まれなければならない。

(ア) 神は、見えるものと見えないもの双方の存在するすべて

のものの創造者であり、保持者である。この創造には道徳的被造物としての人間と霊的存在者が含まれる。

- (イ) 人間は、人間の諸局面において不可分なものとして結び付けられている神の像に創造された。
- (ウ) 肉体・魂・情緒・心は分つことはできない。神は歴史において彼の被造物すべてに対して主権を保持しておられ、神の至高の支配の外で起こるものはなにもない。したがって、宇宙は単に自然的・科学的な法則下にある閉ざされた宇宙として考えることはできない。またサタンが神に匹敵する存在であると理解する二元論的宇宙とみなすこともできない。
- (エ) 私たちは二元論的世界観を拒否するゆえ、神の祝福と天使の群れの奉仕、罪の結果、サタンと悪霊たちの攻撃は、ひとつの霊的領域に単独に孤立したものであるとすることは不可能である。
- (オ) 私たちは、サタンに対するキリストの勝利と私たちを保護する神の主権的権力への信頼を失わせるような範囲にまでサタンに対する恐れに導く、霊の戦いのいかなる教えをも拒否されなければならない。
- (カ) 霊の戦いに関するすべての事柄は、単に私たちが習熟しなければならないテクニックの観点からだけでなく、最初に、なによりも第一に私たちの神との関係、私たちの神への信仰の観点において熟慮されなければならない。
- (キ) キリストの再臨とサタンに対する彼の勝利の究極的な完成は、私たちに今日における霊の戦いの扱いにおける確信と、私たちが今日の世界の出来事を解釈する上でのレンズを与えてくれる。

10. 聖霊の人格と働きは、霊の戦いにおいて中心的である (5)。

(ア) 聖霊の力の付与、霊的賜物の行使、祈りは、霊の戦いに従事する上で前提となる。

(イ) 霊的賜物の行使には、御霊の実が伴わなければならない。

(ウ) 御霊の働きと御言葉は、同伴しなければならない。

②実践における霊の戦い

(ア) 私たちは、サタンと悪霊的なものを教会がどのように扱ってきたのかについての歴史に関する諸レポートを傾聴し、以下のものを書きとめた。

i . 古代教会の歴史から今日の悪魔との戦いや解放において生起しているものとの間には、注目すべき類似性がみられる。

ii . 古代教会におけるサタンや悪霊の諸力や影響からの解放は、教会教父たちによって、復活やキリストについて主張が真理であることの証拠として用いられた。

iii . バプテスマの準備には、悔い改めとともに回心者の生活から悪魔、悪魔的なもの、そして以前の宗教的な忠誠の破棄が含まれていた。この実践は今日においてもある教会においては継続されている。

iv . 欠陥のある啓蒙思潮に影響された世界観に起因する、靈魂の存在の現実性を信じることや霊の戦いに従事することへの今日の西欧教会の不本意性／不能性は、霊の戦いに関する教会の全歴史を代表するものでもなく、今日の歴史における第二、第三世界のキリスト教を特徴づけるものでもない。

v . 伝道の歴史は、福音への反応には力の対決の伴う実例で溢れている。しかし、力の対決はそれ自身で肯定的な反応を保証するものではない。

vi. 教会の歴史はまた、偶像礼拝と悪魔的なものとの結び付きを指摘している。

- (イ) 善をもって悪に打ち勝ち、愛によって人々を勝ち取る「穏やかな侵入」を通して神のために建設的な根拠地づくりのために働くことは、サタンの要塞を破壊するのと同様に重要なことである。したがって、私たちは地域教会とそこで
の信仰生活の重要性と優先性を主張する。
- (ウ) 礼拝は、霊の戦いである。それは、攻撃的で劇的な戦いではないし、目標に向かっての戦略とか手段でもない。それは神であられるその存在全てに向け、私たちの存在しているところの全てをもって応答する心・からだ・霊を意味している。
- (エ) 霊の戦いは、危険なものであり、しばしば犠牲を伴うものでもある。勝利も存在するが、しばしば病気や迫害のような多種多様な形態の攻撃において悪しき者からの反撃もまた存在する。それにも関わらず、私たちはそれが神の国にとってあまりに犠牲を伴うからと回避したり、
霊の戦いに尻ごみしたりすることはない。
- (オ) 霊の戦いのミニストリーは、テクニックとか方法にではなく、諸関係を変化させる力に立脚している。
- (カ) 霊の戦いの出発点は、私たちのイエスとの関係であり、聖霊に傾聴することである。
- (キ) 私たちは、人間が複雑な存在であることを主張する。私たちは、ミニストリーやカウンセリングを行うようになるとき、それが霊的な事柄なのか心理学的な事柄なのかを識別する必要がある。解放のミニストリーと心理学的なカウンセラーは、しばしばこの差異を識別し損なっている。そのような識別における怠慢は傷つけることにつ

ながる。

- (ク) 聖さは、悪に対するクリスチャンの応答として中心的なものである。
 - i. 霊的權威の行使において、人格や聖さに十分な注意を払わない人々は、霊的成長や聖化で欠けるところのない聖書の肖像を不完全なものにしてしまう。
 - ii. 個人的な聖さに十分な注意を払うことなく霊的戦いを実践することは、災いを招き入れることになる。
 - iii. 聖さの追及は、個人のみ限定されることなく、家族、地域教会、そしてより大きな信仰共同体にも適用される。
 - iv. 聖さには人格的敬虔が含まれるとともに、それは社会的諸関係にもまた適用される。
- (ケ) 悪しき者と戦うことは、英雄的な個々人の働きではない。このミニストリーに従事する人々は、とりなしのグループの支えを得ようと努めなければならない。
- (コ) 霊の戦いを通して自由を経験した個々人を継続して導いていくことは、そのミニストリーの不可分な部分である。地域教会がその人々をキリスト教の共同体の中の一員とするよう、また彼らを弟子とするよう励まされなければならない。
- (サ) 私たちは、①地域の実在についてのより優れた知識があると思ひこみ、②地域の教会のクリスチャンを劣っている、あるいは何も知らない者として扱い、③地域の教会のクリスチャンが長期間祈ったり、奉仕し続けることに対する権限を要求し、④大勝利を主張する一方、不釣り合いな結果、ときには痛み、敵意、さらには地域の教会に対する迫害を残す—外部から来て、地域のクリスチャンたちを圧倒し、電撃的な霊の戦いのミニストリーを遂

行し、自己満足による確信や金銭によって大胆になっている人々についての話に悲しみを覚えさせられる。

(シ) 霊の戦いはひとつ以上の敵を意味している。それは、肉、悪魔、この世と戦わなければならない。

i . 私たちは、メディアにおける暴力、ポルノグラフィ、オカルトと同様に、不正、貧困、自民族優越思想、人種差別、民族虐殺、暴力、環境の酷使、戦争などのような社会的悪を驚きの目をもって見ている。

ii . それらの社会的諸悪は、神と人間に対する神の意図に逆らって働く力と支配に基づく人間の組織によって助長され、支えられている。

iii . 社会的・政治的脈絡の力と支配との戦いにおける教会の任務は、偶像礼拝の主張の仮面をはぎ、それらの人間性を失わせる価値や行為を見極め、それらの犠牲者を解放するために働くことである。この働きは、霊的、政治的、社会的行動を含んでいる。

(ス) 私たちは、霊の世界の精巧に仕上げられたヒエラルキー構築に関する聖書的な保証を見いだすことに失敗している。

4. 注意事項

1. 私たちは、霊の戦いという主題に至るとき、その言葉の使用において慎重かつ繊細であるよう勧める。「霊的戦い」という用語は聖書的ではあるが、未信者に攻撃的であり、十字架上で死なれた主に仕える人々から受ける印象としては矛盾していると思われる含意を伝えている。加えて、癒し、解放、力の対決、悪霊憑き、悪霊の影響のある（人、組織、地域）、権

能、等々のような多種多様な霊の戦いの用語に付着している広範囲な意味が存在する。加えて、新しい用語（参照一戦略的レベルの霊的戦い、深いレベルおける癒し、等）が次々と作りだされている。

2. 私たちは、伝統的な宗教や新宗教運動のような、非キリスト教的宗教の信仰や実践とのいかなるシンクレティズムも用心深く避けるよう呼びかける。私たちはまた、新しい信仰者に彼らが霊的な力で彼らの必要を満たすことを福音に期待するときに思慮分別あるようにと主張する。
3. 私たちは、キリスト教用語の魔術的な使用に関し識別すること、そして霊の戦いをキリスト教魔術にすることを避けるように注意することを実践者に呼びかける。
4. 私たちは、霊的権威の行使が霊的乱用に結びつかないことを確実なものとするよう、できる限りの慎重さと共同体による識別を励ます。霊的力や権威のいかなる表現も同情と愛に根ざしてなされなければならない。
5. 霊的領域世界の地方における実在と数世紀にわたって悪魔的なものとの戦いを体験し、その中で生活している人々がいる、世界の別の部分に出かけて行き、近年霊的領域の現実に気づいた異文化働き人の側に、私たちは謙遜とたしなみの外套の必要を大声で叫ぶ。
6. 霊の戦いは、異なった社会において異なったかたちで表現されるゆえ、私たちはひとつの社会で明らかにされた見解・方法・戦略を取り上げ、それらをもうひとつ別の社会で無批判に使用することに対しては強く警告する。
7. 私たちは、悪魔の策略を私たちのものとして採用する誘惑を退けなければならない。それ故、私たちは霊の戦いにおける諸方法は十字架にかかれたキリストのみわざを基盤として

いることに注意を払うよう実践家に勧告する。

- (ア) キリストは、十字架上の身代わりの死を通し神に服従することにより、サタンから権力への請求権を剥奪された。
 - (イ) 戦って阻止することはせずに、キリストはご自身を喜んで犠牲にすることにより、霊の戦いのひとつの模範とされた。
 - (ウ) 私たちが、霊の戦いから十字架を切り離すとき、私たちは勝利者主義の風潮を創り出してしまふ。
8. 私たちは、霊の戦いについての私たちのアプローチや説明が、キリストが自由にするために死なれたはずの、まさにその恐れを新しい回心者に結び付けることのないようにする確実な処置を呼びかける。
 9. 私たちは、人々の行動の代わりに悪霊を非難するかたちでの、諸霊への行き過ぎた強調に対して注意を喚起する。悪霊たちは、ただ人々を通してのみ働くことができる。そして人々は自発的に協同することを選択できるのである。諸霊は、福音に敵対する唯一の源ではない。
 10. 私たちは、宇宙的な戦いの有効性を立証するために、証拠で立証されていない説明を無批判に使用することとともに、見せかけの勝利の報告の中の因果の相互関係や符号における混乱に対して注意を喚起する。
 11. 私たちは、現在におけるあらゆる形態の悪に対して戦わないでいる、ひとつの言い訳として終末論を使用することに対して警告する。

5. 意見に相違のある諸領域

1. 初期の教会において、悪霊との対決は教会が未信者と遭遇し

たところで、きわめてしばしば見られた。伝道の歴史はしばしば力の対決を未信者への福音伝道に結び付けている。聖書箇所は、信者が悪霊によって肉体的に苦しめられることが可能であるけれども (6)、悪霊が信者から追い出される必要があるとの直接の証拠はないと聖書箇所は示している。他方で、それとは逆の証しをすべての大陸の兄弟姉妹から聞いた。このことは、私たちがクリスチャン生活における悪魔的な影響をどのように理解すべきなのかという問題を引き起こしている。私たちは、私たちの協議会においてこの意見の相違を解決することはできなかった。しかし、以下の事柄を書きとめておくことは助けとなると信じる。

- (ア) 私たちは、多くの事例において、クリスチャンになる以前の忠誠を放棄するプロセスを経なかった今日の新しいクリスチャンが、文明以前の教会に規範的であったものの形を変えて保有していることを知っている。あるクリスチャンは彼らの信仰を失ったかもしれない。彼ら自身はクリスチャンと自称するが、単に名目上のクリスチャンにすぎない人たちもいる。ある人たちは、これらのものが、クリスチャンが悪霊に影響されやすいと思われる理由かもしれないと主張している。
- (イ) キリストにあることは、クリスチャンがキリストに属していることを意味し、ちょうど罪と私たちのからだ・知性・感情・意志における罪を処理すべき私たちの必要に関し、私たちの性質が変えられたことを断言しているのだから、私たちがたとえ取り扱われていないとしても、もはやクリスチャンに対して所有権を主張することができない悪霊的なものが、からだ・知性・感情・意志において苦しめ続けることはないと考えerことはおかしいこ

とではない。

2. サタンが、彼自身をある場所に他の場所よりもより強力な力たちで現わし、幾つかの諸霊はある場所に結び付けられているように思うことは可能であるが、私たちは地域を支配する霊に焦点をあてる霊の戦いの諸形態と関連させる多くの教えや実践に対して聖書的保証がほとんど見受けられないように思われるということに意見の一致をみた。私たちは、伝道の有効な道具として地域を支配する霊に対する戦いの祈りに聖書的保証があるかどうかに関して意見の相違を経験した。しかしながら、私たちは、地域を支配する霊に対する戦いの祈りが効果的な伝道の唯一の鍵であるという主張には根拠がないということに意見の一致をみた。
3. 聖書のみから霊的領域を理解することに制限することに対照して、霊的領域からの事柄を、聖書からはただちに実証できない経験から学び、立証することができるとする範囲に関して意見の相違が存在する。ある人々は、経験は霊的戦いを理解する上できわめて重要なものであると主張した。このことは継続中の対話の中で研究されるべきポイントのひとつである。
4. 私たちは、霊的実在と霊の戦いの方法論についての真理が経験に基づいて立証されるのかどうか、またされるのであればどのように立証されるのかについては、意見の一致をみる事ができなかった。他の人々がこの研究方法の有効性を確信していない中で、ある人々は霊的戦いに関する一般原則を明らかにするひとつの手段として霊の戦いのミニストリーの活発な実験に従事している。

6. 継続的研究を必要とする未研究領域

1. 聖書に関するローザンヌの立場を確認しつつ、以下のごとく解釈上の差し迫った必要が存在する。
 - (ア) 霊の戦いについての私たちの理解や神学を定式化することにおいて、文化と経験がひとつの役割を演ずることを考慮する。
 - (イ) 聖書の中に直接に語られていないけれど、クリスチャンの経験の中に生起する諸問題についての調査を考慮する。
 - (ウ) 聖霊が、聖書に明白に教えられていない方法で行動される（使徒 10 と 15 章）ことによって教会を驚かされた。そして再びそのように行動されるかもしれないという現実を受け入れる。
2. 世界中の学校や訓練センターの神学カリキュラムの中に霊の戦いの学科を具体化する差し迫った必要がある。
3. 実証できる方法においてミニストリーの経験を私たちが評価することを認める基準や方法を明らかにする差し迫った必要がある。
4. 人間の複雑さについて明らかになってきている理解は、意義深い探求と考察を必要としている。私たちは特に、以下のことを呼びかける。
 - (ア) 解放のミニストリーに従事している人々と、医療や心理学の専門職の人々との間の継続的な対話
 - (イ) 以前は多重人格疾患と呼ばれていた解離性同一性疾患 (DID) の今日の学識の状態を、解放の実践者と世界中で緊急に分かち合うこと
 - (ウ) 実践者が解離性同一性疾患の人格と霊的存在の相違を識別させる診断的アプローチ

(エ) 個別に、そして相関的に機能するものとして、からだ、知性、感情、霊を不可分なかたちで結びつける人間の包括的な理解を明らかにしていく神学者と医療と心理学の専門職の人々との間の対話

5. 私たちは、関連する諸学問の洞察を基に描くことで霊的戦いの説明により学際的なアプローチに取り組むよう呼びかける
6. 私たちは、私たちの霊的、情緒的、精神的、肉体的な自分自身という、人間存在のすべてについて語る聖化の理解を発展させるよう、諸教会に呼びかける。そのような包括的な聖化の理解は、霊的訓練、内的な癒し、解放についての展開も含んでいる。すべては、聖霊により御言葉を通してクリスチャンの聖化を支える道具とならねばならない (7)。
7. バプテスマ、聖餐式、罪の告白、罪の赦し、洗足、塗油の実践における霊の戦いの役割を調査する必要がある。
8. 私たちは、羨望の助長、物質至上主義、偽りの崇拜対象におけるその役割の見地から広告の欺きや誘惑についての真剣な調査をみたい。

私たちは神をほめたたえる。私たちは、霊の戦いに関して種々様々の神学的、文化的、教会的伝統と立場を代表しているにも関わらず、私たちは互いに学びあうことによって祝福され、鼓舞された。このことは、キリスト教共同体内の霊的戦いやその実践についての理解を明らかにすることが可能であり、その結果、それは早晩教会の日常生活の一部となっていくのだと信じるよう私たちを励ます。私たちは、教会生活の中に霊の戦いについての継続的な学びと適切なミニストリーを取り入れることにおいて、私たちに加わるよう教会を招待する。私たちは特に、悪の現実の真剣な再発見において第二、第三世界の諸教会

にもっと注意深く耳を傾け、彼らに加わるよう、西欧の教会に呼びかける。

参照聖句

- (1) ヨブ 1-2; ゼカリヤ 3:1f; I 歴代誌 21:1; マタイ 4:1-11; マタイ 12:23; ルカ 8:12; 22:3; ヨハネ 13:2; 12:31; 16:11; コロサイ 2:15-22.
- (2) マルコ 3:22; I コリント 2:6-8; 15:24-26; コロサイ 2:15; エペソ 1:21; 3:10; 6:10-18.
- (3) II コリント 2:11; I テサロニケ 3:5; I テモテ 2:14; 黙示録 12:10; マタイ 8:16; マタイ 9:32; マルコ 5:1-20; マルコ 9:17; ルカ 8:30; ヨブ 2:7; マタイ 9:32-33; 12:22-23; 15:22-28; ヨブ 1:16-19.
- (4) ヨハネ 12:31; 16:11, 33; コロサイ 2:15; ヘブル 2:14; I ヨハネ 3:8; 黙示録 5:5; エペソ 6:10-18; ヤコブ 4:7; ルカ 9:1; マタイ 28:18; cf. マタイ 12:28f; エペソ 6:11, 13.
- (5) ガラテヤ 5:22-23; I コリント 13:4-7; エペソ 6:17.
- (6) ルカ 4:38-39; 13:10-13; II コリント 12:7-9.
- (7) ヨハネ 15:3; 17:17.

Ⅲ．協議会に提出された論文と会議の概略 (ナイロビ 2000)

8月16日

- ・オスカー・スカルザウネ博士『古代教会と新約聖書の文献における悪霊憑きと悪霊追い出し』
- ・トルムッド・エンゲルスバイケン『歴史的概観Ⅲ』

8月17日

- ・ジョン・クリストファー・トーマス『聖書の眺望における霊の戦いⅠ』
- ・ファー・ユング博士『悪魔的なものを真剣に取り上げている組織神学における幾つかの問題』
- ・デイビット・G・バーネット『霊の戦いと民族宗教』
- ・A・スコット・モリュー『北アメリカの事例研究：霊の戦いの文献についての概観』
- ・アムサル・タデッセ・ゲルタ『事例研究：エチオピア諸教会における悪霊の影響と悪霊追い出しの実践』

8月18日

- ・ジョン・クリストファー・トーマス『聖書の眺望における霊の戦いⅡ』
- ・ネウザ・イチオカ『一人のブラジル人の視点：ブラジルからの事例研究』
- ・ジェリー・ムンカドジ、BSC、MA、PHD、LPC『心理学と医学の視点における霊の戦い』
- ・オーレ・スケルベク・メディセン『西欧の求道者の間にある霊の戦い』

8月19日

- ・ジョン・クリストファー・トーマス『聖書の眺望における霊の戦いⅢ』
- ・マーガレット・ヤコブ『教会のミニストリーにおける霊の戦い』
- ・ユスフ・ツラキ『クリスチャンの霊の戦いを理解する基盤としてのアフリカの伝統的宗教の体系』

8月21日

- ・トクンボー・アデエモ『" 私たちの戦いの武器 " についての概観』
- ・クヌド・ジョルジェンセン『社会的 - 政治的脈絡：権能と権力』
- ・V・エゼキア・フランシス『インドの文脈における霊の戦い』
- ・チャールズ・H・クラフト『教会の宣教の、霊の戦いの取り扱いにおける今日の傾向』
- ・マルガリーテ・クラフト『霊の戦いと教会の宣教：文化脈化』
- ・リカルド・バルボッサ・デ・ソーサ『ラテン・アメリカの視点からの霊の戦い：ヨブのジレンマ』

8月22日

- ・ロビン・クレイドン『聖書研究：詩編73編』

追加論文

- ・ ジョナサン・チャオ『キリストにある信仰を通してクイゴン
グから自由にされる：ある中国人の事例研究』
- ・ 『霊の戦いに関するローザンヌの声明』（1993）
- ・ チャールズ・クラフト『コンテクスチュアリゼーションと霊
的力』（2000年5月）
- ・ パウロ・G・ヒーバート『霊の戦いと世界観』

関連サイト

尚、『我らを悪より救い出したまえ』—ナイロビ2000の背景・
声明・論文は、下記サイトに英文にて掲載されています。関心
のある方、さらなる研究を志される方はご覧ください。

- ・ ローザンヌ運動ホームページ
<http://www.lausanne.org/home.html>
- ・ ナイロビ2000協議会の背景・声明・論文
<http://www.lausanne.org/nairobi-2000/overview.html>

IV. 誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ No. 61 「霊の戦い」 邦訳出版に際して

2008年8月10日

関西ミッション・リサーチセンター (KMRC)

正木牧人

1. 本書の出所

本書は、霊の戦いに関して開かれた通称「ナイロビ2000」と呼ばれる研究会議の報告書からの抜粋翻訳である。「ナイロビ2000」とは、ローザンヌ世界宣教委員会のもとにある「宣教戦略のワーキンググループ」と「執り成しの祈りのワーキンググループ」がアフリカ福音主義協議会の協力を得て2000年8月16日から22日までケニアのナイロビで開催された「ナイロビ会議」を指す。神学者と実践家のバランス、また地域や教派的背景などのバランスに配慮して集められた参加者が、「我らを悪より救い出したまえ」という「主の祈り」の一節を主題にし、今日宣教に携わる者として無視できない「霊の戦い」について、聖書信仰に立って神学的・実践的・歴史的に、また集中的、包括的に検討した。その結果、「ナイロビ声明」を発表したのである。本書では、この「ナイロビ声明」の背景と本文を翻訳し紹介する。

2. ナイロビ2000の資料は入手可能

会議の内容はワールドビジョンの協力を得て、Lausanne Occasional Papers No.29 "Spiritual Conflict in Today's Mission: A Report from the Consultation on 'Deliver Us

from Evil, ' August 2000, Nairobi, Kenya" というブックレットとなっている。また、会議で発表された論文やもたれた討論をまとめた貴重な 22 の文書と 4 つの関連論文はすべてホームページから閲覧・ダウンロードが可能である。本書でもタイトルと著者名が翻訳されて紹介されている。

3. ローザンヌ宣教運動とワーキンググループ

さて、ローザンヌ世界宣教委員会にはいくつものワーキンググループがあり、宣教の様々な重要な分野で専門的な検討作業が継続的に行われている。そもそもローザンヌ世界宣教運動は 1974 年 7 月 16 日から 25 日までスイスのローザンヌで開かれたローザンヌ世界宣教国際会議を発端とする。それは、旧新約聖書を誤りのない神の言葉と信じる福音派キリスト者が世界の 150 カ国から、また、135 の教派・団体から 2430 人が集い、世界宣教の情熱と戦略を共有する歴史的な会議となった。会議の主題は、世界のキリスト者が移り変わる時代の中で変わらない世界大の宣教ビジョンを共有すること、そしてキリスト者ひとりひとりがそれぞれの国や文化の中でいかに聖書のメッセージに誠実に生き、またそれを人々にわかりやすく届けていくかを自覚的に掘り下げることであった。

4. ローザンヌ世界宣教運動の貢献

ローザンヌ世界宣教国際会議は「ローザンヌ誓約」の採択をもって閉会した。しかし実際には会議は十日間で終わらなかったのである。キリスト者が常に世界的視野に立ちつつ、置かれている文化的・時代的環境の中で宣教のわざに参加するという

ローザンヌ世界宣教会議の精神は、ローザンヌ世界宣教運動として引き継がれた。これら「ローザンヌ誓約」を支持する立場で展開されてきた多くの地域活動、特別会議などの詳細は、www.lausanne.org で公開されているので参照していただきたい。大きな宣教大会としては、1989 年 7 月にフィリピンのマニラで第二回ローザンヌ世界宣教国際会議が開かれ 4300 人が 173 ヶ国から参加した。東欧圏の参加者を得たこと、第一回よりも多くの女性や信徒や青年の参加者を得たことが特徴的である。21 の確認事項と 12 の検討課題からなる「マニラ宣言」が発表された。そして、2010 年 10 月 16 日から 25 日に第三回ローザンヌ世界宣教国際会議が南アフリカのケープタウンで開催される計画があり、準備が進められている。

5. ローザンヌ運動のニュースレターから

「ナイロビ 2000」の成果はローザンヌ・ニュースレター 2000 年 12 月号を通して世界に知らされた。以下、記事を抜粋・翻訳する。

記事から：2000 年 8 月 16 日から 22 日まで、「霊の戦い」に関する会議がローザンヌ世界宣教委員会とアフリカ福音主義協議会の主催で開催された。ナイロビに集まった三十余名の実践家、宣教学者、神学者、牧師らの間で、声明にあるように「サタンが、彼自身をある場所に他の場所よりもより強力なかたちで現わし、幾つかの諸霊はある場所に結び付けられているように思うことは可能であるが、私たちは地域を支配する霊に焦点をあてる霊の戦いの諸形態と関連させる多くの教えや実践に対して聖書的保証がほとんど見受けられないように思われるということに意見の一致をみた。私たちは、伝道の有効な道具として地

域を支配する霊に対する戦いの祈りに聖書的保証があるかどうかに関して意見の相違を経験した。しかしながら、私たちは、地域を支配する霊に対する戦いの祈りが効果的な伝道の唯一の鍵であるという主張には根拠がないということに意見の一致をみた。」

ただ、五大洲 11 ヶ国からの参加者はこぞって、古代の教会と今日の教会における悪霊との戦いが酷似していることに合意している。

第三世界からの数名の発表者らは、霊的な現象や顕現は西洋人にとって新奇なことであったとしても、彼らには何も新しいことではない、と述べた。今や西洋社会から啓蒙主義的な世界観が消えつつあり、霊的世界の現実意識は急速に現代人に広がっている。

このような状況の中で教会はどうしたらよいのか、これが「ナイロビ 2000」の課題であった。牧会とカウンセリングの現場では、心理学的問題と霊的問題を区別しつつ人間を複雑な全体像としてとらえることの必要を認識した。

ナイロビ会議は、「霊の戦い」を教会の全体的働きの一部であると認識した。しかし同時に多くの警告も発した。たとえば用語についてが挙げられる。霊の領域について語るとき用いる言葉に注意しなければならない。聖書で用いられているにせよ、クリスチャンではない人々にとって「霊の戦い」という用語を十字架の上で死んでくださった救い主を信じている者の口から聞くと意外な、攻撃的なものとして響きうる。会議ではまた「癒し」、「解放」、「霊にとりつかれること」など、霊の戦いに関連するいくつかの言葉の定義を試みた。また、警告は「霊の戦い」と古来の霊的なことならについて信じられてきたこととの混淆主義に対して発せられた。「私たちは、キリスト教用語の魔術的

な使用に関し識別すること、そして霊の戦いをキリスト教魔術にすることを避けるように注意することを実践者に呼びかける」と宣言文で述べられている。

ナイロビでは、いくつかの課題は解決が先送りにされた。たとえば、キリスト者は悪霊にとりつかれうるか、について意見は一致していない。会議中報告された霊的出来事の実例の因果関係の検証にも評価が分かれている。

会議には、第三世界からの参加者の存在感が大きかった。会議全体として、西洋のキリスト者は今後第三世界のキリスト者から悪の現実についてもっとよく聞いて学ばなければならない、という考えに同意した。：以上記事から」

6. ローザンヌ運動のこれまでの取り組み

「ナイロビ 2000」に至るまでにローザンヌ運動では「霊の戦い」に関してどのように取り組んできたのであろうか。

「霊の戦い」は第一回ローザンヌ世界宣教国際会議から大切なトピックとして取り上げられた。1979年、15条からなる「ローザンヌ誓約」の第12条が「霊の戦い」という条項になっている。教会を倒し、教会の世界伝道のわざを失敗に終わらせようと絶えずもくろんでいる悪の力と支配とにたいするたゆまざる霊の戦いのただ中におかれている私たちは、真理と祈りという二つの霊的武具をもって戦い続けていく必要を訴える。

1989年、「マニラ宣言」では21の確認事項の第11事項として、「霊の戦い」には御言葉の宣教と祈りという霊的武器が必要とらわれている。

ローザンヌ運動は世界の各地域でも継続して情報交換や課題検討の会議が持たれているが、1992年11月23～28日にインド

ネシアのボガーでもたれた第三回アジア・ローザンヌ宣教会議が開催された際、声明が発表された。その声明は七項目から成るが、その第三項には「伝道は神の国と闇の力の衝突である霊の戦いであるが、時にしるしと不思議を伴う聖霊の力のうちにある私たちは喜ぶ」とされ、更に第四項に「この会議によって私たちは伝道において祈りが最優先されることを再確認した」とまとめられている。

1993年7月10～14日にロンドンのフェアマイルコートで「執り成しの祈りワーキンググループ」の会議が持たれ、「霊の戦いに関する声明」が出されている。要約すれば、「第三世界での教会の急成長がキリスト教とアニミズムとの接点を増したこと、西洋の教育が啓蒙主義的影響から離れる傾向にあることなどから「霊の戦い」に関心が寄せられるようになってきている」と最近の傾向を分析し、「ローザンヌ運動が1989年のマニラ会議や、その後派生したAD2000運動の関わりで「霊の戦い」への関心を喚起した背景があることから、混乱を避け継続して実り豊かな宣教に携わるために、キリスト中心で文化的妥当なバランスのとれた伝道と祈りについての明確な声明が必要とされる」と声明の意義を述べる。さらに、「異教的世界観が教会に持ち込まれたり、人の罪性の責任を棚上げする過度の悪霊糾弾に走ったり、暗闇の力の過度の強調により経験や方法論への関心がキリストへの関心を薄めてしまったり、信仰における中心が「真理」から「力」に代わったり、霊の戦いを戦う技術がきよさや伝道を上回る関心を得たり、霊の力に過度の期待を喚起したり、個人の霊の力が過度に宣伝されたり、霊の戦いに関する用語が他の宗教の人から暴力や政治的関与と誤解されたりすること」などに警告を発し、地域の霊の概念については更に神学的・聖書的な検討を要請している。

「ナイロビ2000」はこのようにローザンヌ運動の建徳的包括的取り組みの流れを背景にもって招集された会議であった。

更に、2004年9月29日から10月5日にタイのパタヤで持たれたローザンヌForum2004では「伝道における祈り」という分科会で「霊の戦い」が取り上げられ、その成果がLausanne Occasional Papersの第42巻にまとめられている。第3章「伝道における霊の戦いの祈り」として討議結果と参考文献リストが掲載されている。神は暗闇の人々を光に導く使命をキリストの体である教会に与えたので、私たちはキリストにより恵みによって救われた者としての場に堅く立ち、罪の力から解放されたことを喜び、神の武具に身を包んで悪魔に抵抗するように、とすすめる。更に、具体的に伝道に先立って祈りの方策を練り実施するように、と実践的な助言と証しが続く。

このようにローザンヌ運動は、情熱をもって世界宣教に関わるとき見えてくる多くの検討課題を積極的に取り扱ってきた。日本でも更に関心が高まり、福音主義に立つローザンヌ運動によって生み出されてきた多くの資源から学ぶ機会が増えることが望まれる。

7. 霊の戦い

さて、近年「霊の戦い」についての関心は高い。これには背景となる歴史的な考察が必要であろう。

天使論は、人の救いに直接の関係を持つ議論ではないので、基本的な神学の枠組みに組み入れられないことが多い。しかし、創世記から黙示録に至るまでキリストのみわざと共に天使の働きが啓示されている。救いに関する中心的教理に含められないとしても、聖書的に神学検討を進める場合に天使論を無視する

ことはできない。また、墮落した天使である悪魔の教えを聖書から正しく理解することは肝要である。

初代教会には悪の霊についていくつかの見解があったが、中世初期には修道院の思想が主要なものとなり、それは砂漠の教父らの育てた伝統的な見解に従っていく。その後スコラ神学のアプローチが主流になっていくが悪の霊についての教えは細部の変遷はあったもののおおむね一貫していた。宗教改革期の神学的仮定も中世的なものを土台としていた。ただし、「聖書のみ」の主張から悪の霊について旧・新約聖書の教えが重視され、聖書に起源をもたない魔術信仰を排除する傾向が顕著になっていく。

宗教改革者マルティン・ルターほど神学と個人的関心を悪魔に多く向けた者はいない。神と悪魔の間に生きるしかないというキリスト者の生活の現実理解を失い悪魔の活動の現実性を否定するとき、キリストは単なる幻の概念になってしまう。キリストへの信頼が深まれば深まるほど、悪魔の攻撃はいよいよ激しくなる。悪魔は誘惑し、気を散らせ、様々な現象を起こしてルターを神のための仕事から引き離そうとする。神を模倣しようとする悪魔は人類をねたむ。天から落とされた悪魔は人類の最初の罪の誘惑者であり、同時に個別の罪の誘惑者である。個人を絶望に、国を戦争に誘う。

ルターは悪魔の存在を当然のことと信じていたが、信仰と迷信の区別をはっきりもっていた。ルターははじめそれまでの中世の迷信に苦しみ、その中で現実には悪魔の試練を経験していく。そして聖書の研究から一つの信仰的な解決を得る。「悪魔をさせる唯一の方法は、キリストに信頼する信仰である。『わたしは洗礼を受けた者である、わたしはクリスチャンである』という宣言による。」また、このようにも言っている。「昨夜目が覚め

ると、悪魔が来て私と議論した。悪魔は私が罪人であるとして、私を叱責し非難した。私はこのように応えた。『悪魔よ、今回は何か新しいことでも言ってくれるのかと思っていたよ。私は多くの混じりけのない本物の罪を犯してきた。神はその愛するひとり子の故に私のすべての罪を赦してくださるのだ。御子のご自分の上に私のすべての罪を担ってくださった。私のおかした罪はもはや私のものではなく、キリストに属するのだ。このすばらしい神の贈り物を、私は遠慮なく受け取っている。悪魔よ、あなたへの応答として、私はこのキリストを告白する。』

悪魔の力はイエス・キリストの受肉によって打ち破られた。悪魔はキリストの働きを妨害したが、キリストの奇跡、説教、受難の死、復活によって悪魔は敗北した。宇宙全体が神と悪魔の緊張関係にある。多くの者が悪魔に従うこの世では、まだ悪魔が力をもっている。この世の国は罪、律法と理性への信頼である。神の国はキリストを頭とする不可視の教会として天の国にあるが、それはこの世にも、腐敗しているが目に見える教会として存在する。それは、イエス・キリストへの信頼、神の言葉である聖書に啓示された救いに洗礼により入れられ聖餐によって支えられる群れである。

ではキリスト者はこの世にあってどのように悪魔と戦うのであろうか。ルターは神の全能性とその歴史の中での発揮を信じていた。悪魔の存在や働きは架空のものではなく現実のものであるが、それはどのようにしても神の支配の外に立つことはできない。悪魔は懸命に自らの目的に従って人々を誘惑し、超個人的な社会的威力さえ主張する。しかし、全能の神は悪魔を神自らの「異なるわざ opus alienum」として用いる。ヨブの試練の際に、神は悪魔を用いた。悪魔の目的は信仰者ヨブを倒すことであつたが、神は神の「異なるわざ」として悪魔を用い、それ

によって信仰の全き従順をヨブに与えるという「本来のわざ opus proprium」をなす。この世に生きるキリスト者は、悪魔のもたらす究極の悪さえも神は善のために用いられる、という信仰をもって、勝利者として生きるのである。信仰をもって、というのは、神の全能は隠されているからである。信仰は聖書の啓示によって顕わにされた神、受肉されたキリストを把握する。キリストの受肉、罪人の義認、罪人の誘惑とキリストにある勝利が、精神的概念なのではなく信仰的経験であることが宗教改革の発見である。ルターは教理問答書の中で、十戒、主の祈り、使徒信条、洗礼、聖餐との関連で悪魔を論じる。しかし、注意を悪魔に向けるのではなく、主に向けることを教えた。

このようにしてルターは、悪魔の存在と働きを現実のものとして認識しつつ、キリストの救いに預かり、全能の神を父として信頼しつつ歩む道へと、歴史を導いた。

カルヴァンもルターほどの強烈な悪魔経験を持たなかったが、神が悪魔の働きを規制していることに関してルターに従った。キリストは悪魔の国の滅亡を目的にして来られた。キリストは悪魔に支払われる賠償金ではなく、使い終わって用済みの道具を壊すように神が悪魔を最後の日にたたきつぶすのである。

キリスト教会の歴史はその後、敬虔主義と啓蒙主義を通過する。敬虔主義の時代には悪魔はキリスト者個人の内的葛藤の相手として限定される。啓蒙主義においては悪魔から人格が奪い取られる。自由主義神学においてブルトマンは非神話化を唱え、悪魔は聖書執筆当時の文化から影響を受けた神話的なもので、その奥にある記者達と信仰集団のねらいを把握することがより重要であると考えた。また、パウル・ティリッヒ、ベルジャーエフ、ラインホルト・ニーバーらは悪魔を世にある「悪魔的」なものとして再定義し、非人道的な社会的勢力や構造として理解す

る。更に、カール・バルトは悪魔は天使の墮落した者、悪い天使というのではなく、天使とは排他的な者、天使に非難され排除されるもの、神の被造物ではなく創造に対する脅威と理解する。

以上のように、近代以降の西洋史において、天使や悪霊など霊的存在については、敬虔主義においてその関係は個人化して共同体意識が希薄になり、また啓蒙主義の時代を経て霊的存在は概念化してしまった。人間の間でキリストの体である教会に属するものとしての意識が希薄となり、教職・信徒、御言葉・聖礼典などの教えが歪曲されていく。また、キリスト教信仰が観念的精神的な伝統としてとらえられ、すべて理性的・合理的に説明可能な理想主義的・非日常的な信仰とされていく。

しかし、戦後これらに対する反動が起こってきた。西洋の教会の植民地的・勝利主義的キリスト教世界観の反省、啓蒙主義一辺倒の思想的反省、中流層無視への反省などに現れている。

その中で、キリスト者の神との個人的・人格的關係、真理概念と共に、実生活における神の力の顕現を重視する、「聖霊の第三の波」とピーター・ワグナーが命名した運動が1970年代以降力を持ってくる。この運動の特徴の一つは悪魔の實在の主張、悪魔は地域を霊的に縛っているという主張、そしてこの悪魔には技術的に戦略的な祈りを持って抵抗することによりその地域の霊を解き、人々が福音に肯定的に応答しやすくなる状況を作ることができるという主張である。そのような流れの中で、集団的罪について集団的に悔い改める(アイデンティフィケーション・リペンタンス)という概念、リン・グリーン発案の和解放の歩行(リコンシリエーション・ウォーク)、祈りの旅(プレイヤジャーニー)、ジョージ・オーティスによる霊界地図(スピリチュアル・マッピング)、などの手法が考案され、また、天の女

王（クイーンオブヘブン）などの概念も実験的に提唱されている。宣教についての教えをまとめると以下の二つになる。第一に、世の人々はさまざまな救いを求めて異教的な神に霊的力を願っているが、宣教は彼らにイエスの力を示し、イエスのもとに導くことである。第二に、「霊の戦い」は信者から悪霊を追い出すことという第一段階、組織化された暗闇のちからに対して戦うという第二段階だけではなく、さらに、一定の地域の人々をキリストの福音に対して盲目にさせる暗闇の活動を担う高位の諸霊に対決するという第三段階の分野にまで及ぶべきである。

チャールズ・クラフトは、1989年にマニラでもたれた第二回ローザンヌ世界宣教国際会議ではカリスマ運動や第三の波への開かれた態度が見られたとして高く評価する。彼らの間で指導的立場の講師が全体会議で重要な役割の一端を担ったこと、「霊の戦い」に関する三つの分科会に多くの参加者が集い、関心の高さが示されたことなどがその理由である。その後、ローザンヌ運動の中で第三世界の台頭と西洋社会の変化に対応する新しい概念として、「霊の戦い」と祈りへの関心が高まる。同時に、そのような新しい時代的要請への取り組みには「第三の波」以外の選択肢はないのであろうか、という懸念も高まっている。世界の福音派のキリスト教会の中で、このような関心と懸念が両輪のようにすすみ分裂や混乱が生じていることについて、ローザンヌ委員会は積極的に取り組んできた。その取り組みのひとつが本書、ナイロビ宣言に結実しているのである。

8. KMRC の歩みと本書の出版

関西ミッション・リサーチセンター（KMRC）は1980年発足以来、活動のひとつとしてローザンヌ世界宣教運動と日本を結ぶ

架け橋になってきた。

現在は第三回ローザンヌ世界宣教国際大会に向けて日本における窓口となっている。

また、関西ミッション・リサーチセンターのローザンヌ関係の成果としては「誰もが知りたい・ローザンヌ宣教シリーズ」の出版がある。「福音と文化」、「難民への伝道」、「中国人への伝道」、「伝道と世俗化」、「伝道と新宗教」、「イスラム教徒への伝道」、「伝道と仏教徒」、「シンプル・ライフ・スタイルへのすすめ」、「伝道と社会的責任」、「名目上のクリスチャン」、「続・名目上のクリスチャン」、「日本人による海外宣教の歩み」、「ローザンヌからマニラまで：マニラ宣言全文訳およびその解説付き」、そして「ユダヤ人伝道」である。またボッシュの「宣教のパラダイム転換」上巻・下巻の監修と出版の協力にも携わってきた。

このたび第十五冊目の「ローザンヌ宣教シリーズ」を刊行する運びになったことは大きな喜びである。

本書出版に当たり関西ミッション・リサーチセンターはローザンヌ世界宣教委員会に著作権の問い合わせをしたが、委員会総裁のダグ・バーゼル氏とワールドビジョンのジョージョ・パーマー氏が励ましと共に快く許可して下さった。

翻訳者の安黒務氏をはじめ本書の重要性を認めて出版協力をしてくださった日本福音教会の迅速かつ丁寧な働きに深く感謝をするものである。

誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ No. 61
霊の戦い

定価 500 円 税込 (本体 477 円 + 税)

2008 年 8 月 15 日

翻訳者 安黒 務

発行所 関西ミッション・リサーチ・センター (KMRC)

〒 651-0052 神戸市中央区中島通 2-3-5

神戸ルーテル神学校内

電話 078-221-6956

ISBN 978-4-938764-05-0 C0016 ¥477E